

第4章 総括

縄文時代

縄文時代は、アカホヤを挟んで早期と後期の遺構・遺物が確認された。

縄文時代早期の遺構は陥し穴状遺構が8基検出された。幅が狭く二か所の逆茂木痕を伴うものが主体である。ただSC8は幅広で多くの逆茂木痕を伴っており、時期差が考えられる。包含層からの遺物がごく少量に留まるのは、陥没谷や地滑りもある複雑な地形を呈していたためであろう。当時調査地の大半は毘場もしくは狩場だったと推測される。

縄文時代後期は石錘が集中して出土したが、それ以外の遺物が少ないので様相が定かでない。この時期曾井遺跡では縄文時代後期の遺物が造成層から多量に確認され台地上に集落が存在したと推測される。調査地はその生活圏の一部と推測される。

弥生時代・古墳時代

弥生時代の遺構は確認されていないが、遺物は陥没谷と地滑り部分の底面から出土しており、造成と共に混入したと考えられる。出土土器は中期にあたる。周辺では家次遺跡や福神屋敷遺跡において弥生時代の遺物が多く確認されており、調査地にも小規模ながら集落が存在したことを窺わせる。

古墳時代も遺構は確認されておらず、遺物は地滑り部分からの出土である。提瓶は把手の形状から6世紀前葉～中葉と考えられる。管玉の出土も併せて古墳の存在が窺えるが、模倣坏は集落から出土することが多く、現時点では推論に過ぎない。

古代

SB4は9間×2間であり、そのような配置は所謂「長舎」に類似する（長2014）。この遺構は、周辺では西都市松本原遺跡や古城第2遺跡で確認例がある（今塩屋 毅行・日高広人・高村哲2020、宮崎市教育委員会2015）。

SA3について、9m×8.6mという規模は県内の竪穴建物でも突出している。建物内の柱穴は不規則かつ小規模であり明確ではなかったが、遺構の小穴は竪穴建物に関連する可能性が高い。なお、このような小穴の類例として下耳切第3遺跡のSA18が考えられる（宮崎県埋蔵文化財センター2006）。煙道は長く、カマド体部と共に白色の粘土を用いている。宮崎平野には長い煙道を伴う竪穴建物は下田畑遺跡（宮崎県教育委員会1985）や京園遺跡（宮崎市教育委員会1998）で類例があるが、本例はより大規模である。

出土遺物に目を転じると、SA3や一括廃棄から出土した「手持ちヘラケズリ」による丸底坏は、これまで市内でも陣ノ内遺跡等で確認例があったが、今回の調査でまとまって出土した。このほか黒色土器は、坏以外に皿形や鉢形など多くの器種が確認され、本遺跡独自の特徴といえる。布痕土器の多さも特徴に挙げられる。市内の遺跡でも卓越した量であり、遺跡の「公」的な性格を強く浮き立たせている。更に白磁、灰釉陶器、越州窯青磁などの輸入陶磁器や緑釉陶器など国産華奢品は、宮崎平野では最多クラスである。また平石等中央政権との文化的つながりを

示す遺物も出土している。

調査区内の変遷について考察すると、

- ・SB1 と SB2、SB3 と SB4 の方位はほぼ同一であることから同時性が想定できる。
- ・年代測定結果、焼土遺構と SH64、SA1 と SA3 の時期が接近する。
- ・SA1 の土層堆積から SB4 → SA1 → SB2 と変遷する。

これらの材料から他の遺構も併せると、①期：焼土遺構・SH64 → ②期：SB3.4 → ③期：SA1.3 → ④期：SB1.2 となる。

出土遺物を加えると、①期は出土遺物がないため検証不能だが、②期にあたる SB5 と③期の SA1・SA3 は堀田編年（堀田 2012）における第Ⅰ期～第Ⅱ期（8 世紀末～9 世紀中頃）にあたる。なお SA4 土坑から出土した甕は「企救型甕（今塩屋 2011）」にあたり、8 世紀後葉～9 世紀前葉に比定される事から SA1・SA3 と時期的接近が想定される。これに対し④期にあたる SB1.2 出土遺物は少量ながら堀田編年の第Ⅲ期（9 世紀末～10 世紀前葉）にあたることから、遺物のうえでも一応は前後関係を首肯しうる。SB4 における”仕切り”の存在も 8 世紀以降とされており矛盾しない。なお「長舎」は 7 世紀においては 7 世紀代は屯倉とされているが、8 世紀半ば以降その性格が弱まるとの指摘もある。SB4 はそれより更に後出であることから、建物の役割についてはここでは言及を避けたい。

沈降谷や地滑り部分の出土遺物は堀田編年第Ⅰ期が地滑り部で少量出土する程度であり、主体は第Ⅱ期・第Ⅲ期である。つまり調査区は、③の時期までに弥生時代の遺物包含層や古墳時代の遺構を伴う丘陵の一部を削平して地滑り部の谷を埋めた後、④の時期に沈降谷に拡大して一括廃棄を行い、平坦地となったと考えられる。

本遺跡は公的な性格を帯びる一方で独自性の強さも窺える。本遺跡について柴田博子教授（宮崎産業経営大学）からは「俘囚」に関連する可能性をご教示いただいた。俘囚に関しては近年宮崎平野の古代において、遺構・遺物の検討から存在が指摘されており（柴田 2023）、本遺跡の特徴はそれを示唆する可能性がある。今後研究が進展することを待ちたい。

中世

祭祀遺構と考えられる SC11 は炭化物から年代測定を行い、鎌倉時代後期～南北朝期と判明した。墓壇（SC12）は多くの出土遺物が確認された。長胴の土師器は予め欠損して副葬されたと考えられるが時期が判別しがたく、今後の検討が必要である。道路状遺構は地滑り跡の脇を通り丘陵上で終わっている。末端部は柱穴等の遺構がないため詳細は不明だが、板状を呈する大ぶりの円礫が複数存在することから「石場建て」による建物が存在した可能性も考えられる。出土した土師器は祭祀遺構とは形態が異なっており、より後出と考えられる。南側にある掘立柱建物の周辺は近世の造成を免れて半島状の突出部が残されている。これは道路状遺構末端部と共に社寺等が建てられた結果ではないだろうか。

中世は祭祀性の強い土地利用が窺える。付近には在地権力者の屋敷であるぎによもん屋敷遺跡があり、町ノ前遺跡はその祭祀空間であった可能性が考えられる。

近世

調査区の東側に深さ 1m に及ぶ大規模な造成が行われ、一段低い段が設けられた。造成は複数回にわたったと考えられ、中央がより古く、その後に南と北に拡張したと考えられる。造成の中央では SB7 を検出した。この造成が中世の SB5 や近世の経石に隣接することや、SB7 の位置が造成の中央部にあたることから、SB5 より後出の社寺等と推測される。造成は上段にも及んでおり、その平坦面には SB6 やピット群が分布する。つまり中世以来の祭祀空間が近世に拡大した可能性が推測される。調査地の小字名は町ノ前であるが、近世は丘陵下に町が営まれ、調査地は祭礼の場であったと推測される。

(参考文献)

- 今塩屋 毅行 2011 「日向国における古代前期の土師器甕とその様相－時間軸の設定を目指して－」
『古文化談叢』第 65 集 (3)
- 今塩屋 毅行・日高広人・高村哲 2020 「宮崎県西都市松本原遺跡の「長舎」について」
『宮崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第 5 集
- 近沢 恒典 2020 「都城盆地における古代土器編年について」
『大正大学考古学論集』大正大学考古学論集刊行会
- 堀田 孝博 2012 「宮崎平野部における平安時代の土器について－土師器供膳具を中心に」『宮崎考古』第 23 号
- 堀田 孝博 2019 「陶磁器から見た南九州の海の路」西都原考古博物館国際交流展関連講座資料
- 長 直信 2014 「九州における長舎の出現と展開－7 世紀代を中心に－」
『第 17 回 古代官衙・集落研究会報告書 長舎と官衙の建物配置 報告編』奈良文化財研究所
- 栗畑 光博 2022 「都城盆地における 8 世紀後半から 10 世紀の集落動態とその背景
－横市川流域の遺跡群を中心として－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 232 集
- 柴田 博子 2023 「令制「日向国」の誕生」西都原考古博物館企画展関連講座資料
- 宮崎県教育委員会 1986 『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第 3 集
- 宮崎市教育委員会 1998 『京園遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 34 集
- 都城市教育委員会 2014 『真米田遺跡』都城市文化財調査報告書 第 111 集 土師器・黒色土器編年
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006 『下耳切第 3 遺跡〔第二分冊 古墳時代以降編〕』
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 125 集
- 西都市教育委員会編 2006 『西都原遺跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第 45 集
- 大分市教育委員会 2010 8 『下郡遺跡群Ⅶ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第 100 集